

田原市地域学校協働活動について

1 田原市の概要 (H30.9 現在)

人口 : 62,673 人 世帯数 : 22,443 世帯

産業 : 農業算出額 全国 1 位 (H28)

製造品等出荷額 県内 5 位 (H29)

学校 : 小学校 18 校 3,310 人 (141 学級)

中学校 6 校 1,686 人 (53 学級)

県立高校 3 校 生徒数計 1,501 人

(補足)

※市内には小学校区を中心に 20 カ所に市民館が設置されており、地域活動の拠点となっている。

※現在、小中学校の統廃合が進められている。平成 27 年度には和地・堀切・伊良湖小学校 3 校が統合して伊良湖岬小学校になり、平成 28 年度には野田中学校が田原中学校へ統合した。今後は、平成 31 年度に伊良湖岬中学校が福江中学校へ、平成 33 年度には泉中学校が赤羽根中学校へ統合することが決定している。(小学校は 20 校→現在 18 校、中学校は最終的に 7 校→4 校)

※福江中学校は、平成 31 年度からコミュニティスクールとなるため設置準備中である。



2 地域学校協働活動の概要

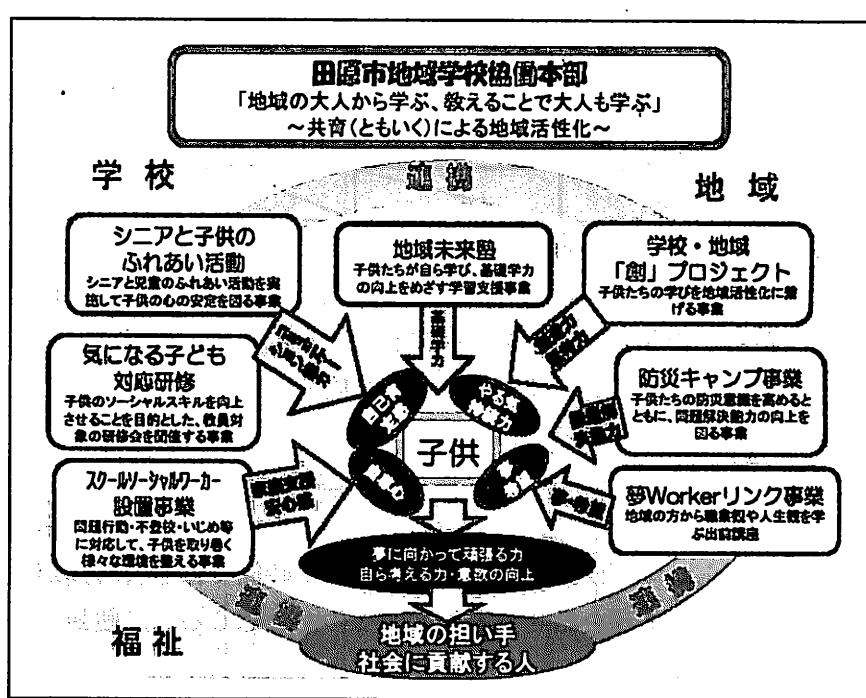
(1) 経緯

地域学校協働活動は、生涯学習課が平成 24 年度から地域と学校が連携して「防災キャンプ事業」を実施したことがきっかけとなり、具体的な活動を推進してきた。学校活動と地域をつなぐ「共育コーディネーター」を配置し、社会教育の立場から地域学校連携事業の拡充を図ってきた。学校への参画及び連携を強化するために、平成 27 年度からは業務を学校教育課に移管し「学校支援地域本部」を立ち上げた。そして、これまでの活動と各学校が実施する「ふるさと学習」を組み合わせ、「学校・地域『創』プロジェクト」を開始した。

地域の人材及び地域資源を活用して、子どもによる地域の課題発掘・解決を学習内容としている。

平成 28 年度からは、中学生を対象とした「たはら地域未来塾」を開始し、学校と連携しながら生徒の学習習慣の定着を図っている。

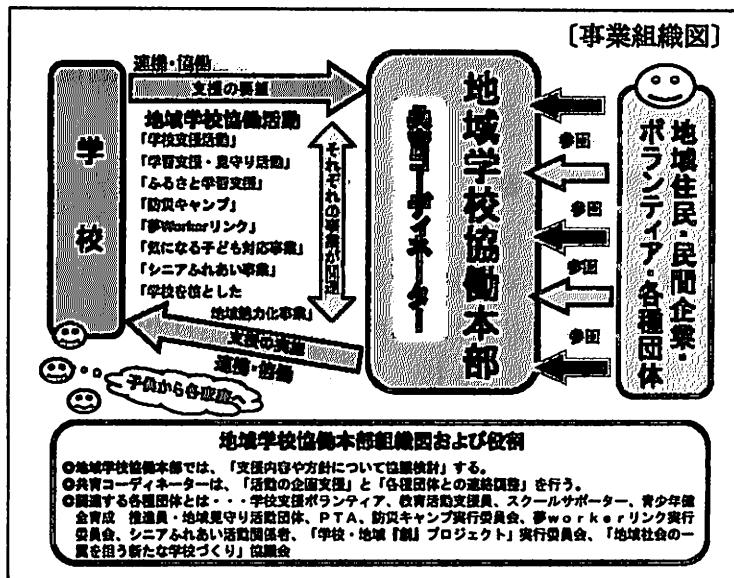
平成 29 年度からは、「学校支援地域本部」が「地域学校協働本部」となり、活動内容の主軸が学校支援から地域づくり・人づくりへとシフトしている。



(2) 協働本部の役割

「地域の大人から学び、教えることで大人も学ぶ」をコンセプトとして、地域全体で子育てを支援する多種多様な取組を展開している。

協働本部は多様な立場の委員に意見をいただきながら活動内容の企画を行っている。実働は、年度当初に共育コーディネーターが学校へ活動内容のヒアリングを行ったうえで、必要に応じて市民・団体・企業とのコーディネートや活動の支援を実施している。また、参加対象者となる人材の掘り起こしや協力要請なども行っている。



3 地域学校協働活動の具体的な内容

※〔 〕は各事業のテーマ

(1) たはら地域未来塾 [基礎学力向上×子どもの居場所づくり×地域教育力の底上げ]

- ・学習の遅れがちな中学生等を対象として、学習習慣の定着を図るため、無料の学習支援を実施。学校と連携を図り、支援が必要な子どもの居場所づくりとしても活用する。
- ・毎週木曜日に1時間で実施（福江市民館のみ常時2時間、夏季は各箇所で2時間の実施）
- ・平成28年度から市内3中学校区で開始。平成30年度からは4中学校区に拡充した。
- ・自主学習を主として、タブレットなども活用している。（学校教育課で10台保有）
- ・講師は、教員OBと地域住民。生徒は基本は自学とし、分からぬところを教えてもらう。

〔未来塾受講者の状況 平成30年度〕

会場	開催日	時間	講師数	受講者 数	内訳		
					1年	2年	3年生
福江市民館	毎週木曜日の授業後 (変更あり)	2時間	3人	52人	23人	12人	17人
東部中学校		1時間	2人	19人	5人	6人	8人
田原中学校		1時間	2人	11人	2人	2人	7人
赤羽根市民館		1時間	2人	13人	8人	2人	3人
合計				95人	38人	22人	35人

〔活動参加者からの意見〕

生徒の感想 近くの人と教え合って勉強できた。／先輩、後輩とも話すきっかけができた。／先生がわからないところを丁寧に教えてくれる。／家では勉強しないけれど、未来塾は集中して勉強できる。／生徒に対する先生の人数が少ない（福江）。／時間が短すぎる（東部・田原・赤羽根）。／教室が暑すぎる（田原）。

講師の感想 子どもたちと接して、こちらが元気をもらっている。／やりがいを感じている。／地域貢献していきたい。／学力の低い子にももっときてもらいたい。／中学生を教えてみて、小学生からの学力が大切だと感じる。／1時間では学習時間が短いと感じる。／たまにうるさい時があるが、本音を話せる場も大切なこと感じる。／勉強ができない子についてもっと丁寧に教えたい。

【担当者から見た成果と課題】

- ・地域未来塾が地域や学校、生徒の間でようやく認知され、未来塾の必要性が理解されてきている。
- ・2・3年生は、下級生に勉強を教えたり、騒がしい時は注意している。また、最後の掃除や片付けなどを進んで行う様子もみられ、学年を越えて生徒同士の関係性、主体性も育ってきていると感じる。
- ・定員数（30人）を大幅に超過している教室があり、講師が不足している。受講者の選定をすべきか、全て受け入れるべきか検討課題となっている（講師、学校、教育委員会で検討中）。
- ・従前から地域住民の方がボランティアで受講無料の「寺子屋」を実施しており（会場：市民館、対象：小学校の4～6学年／高校生）、市が実施している地域未来塾とも連携していきたいと考えている。学習支援ボランティアに参加希望の方には、未来塾・寺子屋を紹介して、見学に来ていただきたい、講師が不足したときには参加をお願いしたり、寺子屋とも連携・交流をしている。
- ・可能であれば、近隣の大学等で学生ボランティアの募集も行って行きたいと考えている。

（2）学校を核とした地域魅力化事業

「学校・地域『創』プロジェクト」　〔課題解決能力向上×地域貢献・地域活性化〕

子どもたちの学びを地域活性化やまちづくりに繋げる事業である。特色あるふるさと学習に関連づけて実施している。地域と学校が連携して、魅力ある地域づくりを推進している。地域の人から地域の伝統・文化・産業を学んだり、地域の魅力発信・P Rの提案、地域活動への参画などに取り組んだりしている。

■福江中学校ボランティアクラブ「ドリームの会」の紹介

福江中学校では、生徒が学んで提案したプランをボランティアクラブ「ドリームの会」が地域の大人の力を借りながら、地域で実践するという体制を構築してきた。福江中学校の約半数の生徒が所属している（全校337人）。中学校区でも「ドリームの会」の活動が浸透しており、海岸清掃、まちの環境美化活動や市民団体によるボランティア活動などへの協力要請があり、それに応じて生徒が派遣されている。「福江・清田校区まちづくり協議会」や市民活動団体「渥美半島ハーブの会」とも連携し、地域学校協働活動を継続的に実施している。以下の活動は、平成29年に国土交通省「都市景観大賞」を受賞した。

【活動例①】「ラベンダープロジェクト」

ドリームの会、園芸部の生徒、市民活動団体「渥美半島ハーブの会」が共同し、ラベンダーを栽培し、ハーブを使った商品開発（石けん、ハーブウォーター、ラベンダースティック）や地域活性化の方法を検討している。栽培したラベンダーから抽出したハーブウォーターを地域の施設やイベントで紹介、配布することで地域活性化につなげている。

【活動例②】「つるし飾りロード」

福江・清田校区まちづくり協議会と連携して、菜の花・桜まつりの開催に合わせてつるし雛を製作し、旅館や商店街などの軒先に飾り付け、地域の魅力づくりにつなげている。この事業は地域恒例のイベントとして定着しつつある。

（3）その他の各種活動

「シニアと子どものふれあい活動」　〔豊かな人づくり×地域コミュニティの強化〕

衣笠小学校の児童と、地域の里山ガイドなどを行っているシニア世代の団体と、モノづくりを通してふれあい活動を行っている。地域の人と子どもたちの絆づくり、シニアの生きがいづくりに寄与している（竹の水鉄砲、竹笛、どんぐりごま作りなど）。

「避難所宿泊体験（防災キャンプ）事業」【子どもの生き抜く力向上×地域防災力の強化】

小学校を対象として、コミュニティ協議会、地域の消防団、防災関連のボランティアなどの協力を得ながら実施。協働本部が防災学習や講師の手配などの支援を行っている。

「夢Workerリンク」【キャリア教育×地域の人材の発掘】

地域で活躍する企業や職人、農業者、市民活動団体などを講師として学校に派遣し、子どもたちに職業観や人生観を語っていただいている。職業学習の意識付けとして主に中学校で開催しており、共育コーディネーターが新たな講師人材の発掘を行う。

「気になる子ども対応研修」・「スクールソーシャルワーカー設置事業」

困り感を抱える子どもや家庭、教員をサポートするため、専門的知識をもつスクールソーシャルワーカーを配置して各機関と連携を行い、必要に応じて子ども・家庭・学校への支援を行っている。また、教員を対象とした子どものソーシャルスキル向上のための研修会を開催し、子どもの成長をサポートできる体制づくりを進めている。

4 今後の活動及び課題について

（1）中学校区への地域コーディネーターの配置

来年度からはじまる福江中学校のコミュニティスクールに伴い、今後は学校区に地域コーディネーターを配置できるように準備を進めている。各学校区により地域の特性がかなり異なるため、コーディネーターの配置にあたっては、委嘱する人物の役割や各学校区の特性に配慮して配置することが必要となる。

コミュニティスクールを推進する上で、各地区の市民館とも連携していくこととなるが、市民館はコミュニティ協議会に所属するため、各学校区のコミュニティ協議会の理解を得る必要がある。市（行政）内でも、市長部局をはじめ多部署との調整が必要となる。

（2）ボランティア・学習支援の人材確保

本市は、近隣に大学等もなく、学生等のボランティアを募集するのが困難な地域である。学習支援の講師については、教員OBや主婦、シニア人材が主と考えているが、人数が不足しており、有志を募集している。また、ボランティアの活用については、それぞれの関係部署（市民協働担当課、社会福祉協議会など）で登録者のリストを持っているが、それらを集約し、地域や学校で協力者募集等の情報発信に利用できないか検討している。

（3）事業費の確保

地域学校協働本部はボランティア活動が前提のため、予算確保が年々厳しくなっている。地域未来塾の実施については、1回1時間を基本としているが、1回の時間数を増やしたいという意見が出ているものの、予算の都合で、時間数を増やすことが困難になっている。財政担当課とも折衝しているが、今後、講師を無償のボランティアに切り替えていくことも検討しなければならない。その場合、現在の講師への説明や、継続的な人材を確保していくのか課題となっている。

資料C-2

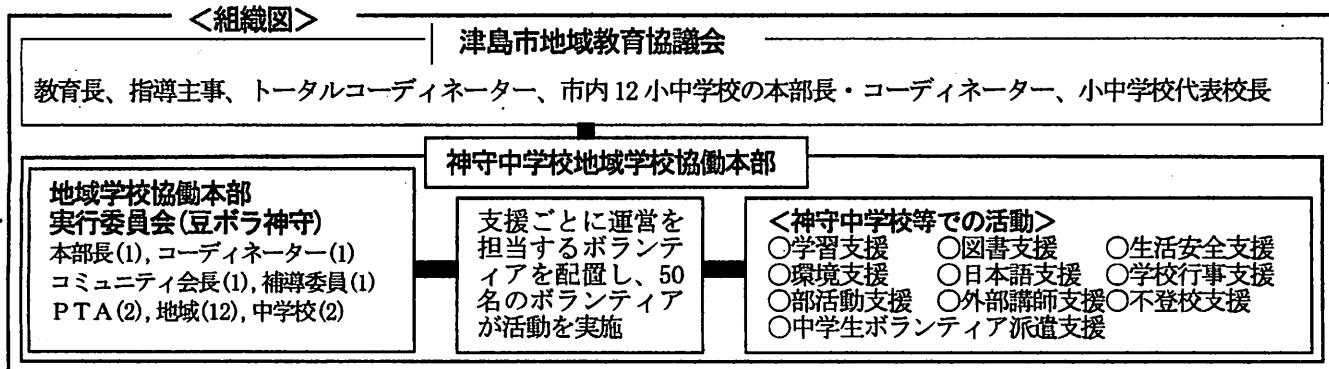
平成29年度地域コーディネーター等研修会②(7/19) 資料

「地域学校協働活動における地域コーディネーターの実際」(津島市)

神守中学校地域学校協働本部(豆ボラ神守)

1 取組の目的・経緯 学校の荒れを解消し、教育課題（非行・不登校・学力等）克服のために、学校を名実ともに地域に開き、保護者以外の地域住民の協力を得るため、平成22年10月に文科省の委託事業である学校支援地域本部（豆ボラ神守）として発足した。平成28年7月から「学校支援地域本部」を「地域学校協働本部」とし、学校・家庭・地域が一体となって、地域ぐるみで子どもを育てる体制を目指している。

<組織図>



2 事務局の設置 地域住民が日常的に直接生徒と関わることができるように、また、学校と地域のスムーズな連携やボランティア相互の交流の場となるよう、稼働率が低く、外部からも入退室しやすい部屋（調理準備室）を、本部事務局とした。

- <事務局の状況>
- 外部出入口のカギ貸与（コーディネーター管理）
 - 365日24時間利用可能
 - 備品（パソコン、コピー機、携帯電話、水回り、冷蔵庫等）



3 主な取組の概要 (平成22年度～現在)

●事業推進での目的 「地域学校協働活動」では、これまで地域から学校への一方の支援活動であった「学校支援地域本部活動」を、組織的には、地域の諸団体との緩やかなネットワークを形成し、「支援」から「連携・協働」への発展を目的にしている。また、「個別」の活動を「総合化・ネットワーク化」し、コーディネート機能を生かしながら、多様で継続的な活動を通して、「学校とともにある地域づくり」を目指している。

●豆ボラ神守が重要視する「ナナメの関係」「つなぐ」「循環・持続・協働・自立」「コミュニティ・ラーニング」

東京都初の民間人校長であった藤原和博氏が提唱する「ナナメの関係（利害関係のない第三者の関係）」を活動のすべてで取り込み、コーディネーターを始め協働本部のメンバーは、そのための「つなぐ」役目を担っている。大学生ボランティアや退職教職員、地域のおじさん・おばさんなどが、生徒の悩みに寄り添い、ストレスを和らげ、本音トークで子どもたちを包み込んでくれる関係を重視している。非行、不登校、いじめ、思春期の友人関係での悩み、学びのつまずきなど、子どもたちの良き相談者やアドバイザーとなることを大事にしている。また、次代を担う町の人材育成のために、中学生ボランティア活動（コミュニティ・ラーニング）を継続し、「してもらう(take)」から「させていただく(give)」への循環をつくることで、自立した協働のまちの実現を目指している。

● 学習支援 寺子屋（月テラ・ドテラ）の実施 高校進学を控えた3年生の困り感に寄り添い、学習に困難を抱えている生徒や不登校で学習機会がない生徒への支援の場として、土曜日の午前（ドテラ）に、大学生のボランティア、退職教員を支援者として、平成22年度より10月～3月に20～25回の学習支援を実施している。

また、平成23年度より、対象を1,2,3年生にも広げるために、部活動のない月曜日の放課後（月テラ）に、退職教員を中心に、学習支援を行っている。自学自習の形態の中で、生徒同士が教え合ったり、学ボラさんに気軽に質問したりしながら、学ぶことの楽しさや学習習慣の確立を目指している。10～20名の参加があり、10月～2月末までの10回で、15:00～17:00の2時間で図書室で実施している。

<成果・効果>

- ・個別指導で成績がアップし、志望校合格に
- ・大人しい生徒が積極的になり、希望大学生を逆指名するほどに
- ・思春期の悩み相談にも学ボラのアドバイスで、心の安定につながり、受験の面接・作文指導も大学生から受け、コツを伝授され、自信と励みに
- ・外国人生徒への日本語及び受験勉強も指導する場に（定時制へ合格）
- ・保護者からは、我が子が目標を持ち始め学習に意欲的になり、喜びの声が寄せられ、弟が3年生になったときに、ドテラにも参加することに
- ・生徒は大学生に会えるのを楽しみに、塾よりもわかりやすいし、年齢が近く聞きやすいとの声
- ・個人ファイルを学習状況の報告や保護者との情報交換に活用し、保護者の期待も大きくなる
- ・教員志望の大学生がほとんどで、大学間交流が刺激になり、教探学習会を自主的に開催したり、情報共有の場や励みになったりしている
- ・学習スタッフも、問題を共に解く姿にやりがいを感じ、ボランティアさんへのおもてなしに力が入り、元気の源に
- ・2次障害を起こしていた発達障害（アスペルガー）の生徒のドテラでのVTRを見て、教師も授業時の表情との違いに感心
- ・不登校の生徒も、分かる喜びで生き生きとした姿に



● 図書支援（図書ボラ） 平成23年度から、学校で朝読書を実施する上で、図書室の環境・運営上の課題を「図書ボラ」の支援により解決を図った。それまでの図書室は、旧字の書物ばかりで、暗くかび臭く、週3日の昼休みのみの開館で使用頻度が低かった。読書が好きな生徒も非常に少なかったため、借りやすく明るく毎日来だくなり、地域の大人との会話もできるホットできる場所にと図書室改造を進めた。地域から図書ボランティアを募集して、閉館していた火・木曜日にも開館して、直接カウンターでの受付業務を、8年間継続している。23年度には、全蔵書のバーコード化を延べ2か月かけて行い、マンガ本や時流の書物を積極的に購入して、掲示物の工夫や飾りつけなどで、生徒の読書活動を推進している。

<成果・効果>

- ・朝の読書ができるようになって、落ち着いた静かな1日のスタートに
- ・読書量（貸し出し冊数）が年間2400冊になり、読書好きも全国並みに
- ・遅刻者数が激減する
- ・昼の休み時間の図書室は、多い日で100名が利用
- ・クラスで孤立し、友達のいない生徒は、ホットできる居場所に
- ・図書ボランティアスタッフは、生徒との会話や活動の励みに
- ・書架は、地元の大工・建築士の方が材料費だけで6本製作していただく



● 中学生のボランティア活動（学校から地域へ） 20年後の地域住民

のボランティア・スピリッツを醸成するために、中学生による地域貢献活動（コミュニティ・サービス）を活動に組み入れている。次の震災に備え、地域の防災・減災の担い手育成という意味においても重要な取組としている。

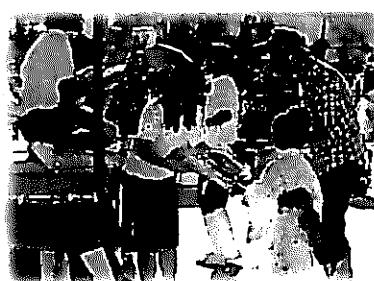
校区の3小学校にある「各地域コミュニティ」と連携・協働し、地域行事や防災訓練等に、積極的に中学生のボランティアを派遣する活動を推進している。

コミュニティ関係者による行事の説明会や役割分担を事前に参加中学生に指導していただき、前日準備として集会用テントの設営や会場準備なども行っている。ボランティア依頼は、校内にある専用掲示板に、直接氏名を書き込む形式で、朝のショートタイムで全校生徒に伝えると、ほぼその日に50名以上の参加要請人数が埋まるほど、生徒の関心や意欲が高い。毎回、地域からは、中学生の活躍に好感度と感謝の声ばかりで、参加した中学生も、来年も是非行きたいとの感想がほとんどである。年間10回ほどの依頼があり、中学生がなくてはならない存在となってきた。また、技術・家庭科の保育の授業にも、例年園児が中学校を訪問して交流している。そのお礼も兼ねて、保育園の行事の準備や当日の運営にも、中学生がボランティアに出かけている。

「小中高時代の地域活動への参加率が高い子どもは、大人になってからのボランティアへの参加率も高い」というデータがある。次代の地域の核となる人材になればと、今後もコミュニケーション・ラーニングを継続していきたい。

<成果・効果>

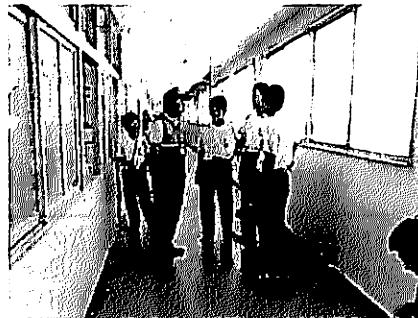
- ・人生の空白年代（中学生）が町の一員として活躍
- ・地域の交流を通して中学生の存在を身近に感じ、好印象に
- ・高齢者が多くなり、力仕事の準備に非常に助かったとの声が多く、中学生が行事に欠かすことのできない存在に
- ・中学生の一生懸命で積極的な姿や笑顔に、スタッフの皆さんも癒され、地域の将来に明るさと大きな財産になる
- ・地域を知らなかつた中学生が、地域の人の大きさを再認識



●生活安全支援 生活安全ボランティアと津島少年補導委員（校区5名）と津島警察署少年係が協働し、毎月1回、清掃時から昼休みと5限開始までの時間帯に、生徒への声掛けや注意・賞賛など、自己紹介しながら、生徒と顔見知りの関係になる活動をしている。これにより地域でも声掛けがしやすい良好な関係づくりをして、非行の抑止力になればと継続活動を実施している。定期的に校内巡回をすることで、学校の教員・生徒の変化に気づき、地域と連携した生徒指導に役立っている。また、活動後には、気付きを学校へ伝えたり、地域での生徒の様子の情報が学校にも入る。年に1～2回は、給食をとりながら、「風と土の会（先生と地域の交流会）」を実施し、いじめや不登校などの生徒指導上の諸問題の情報交換も行っており、豆ボラは、生徒だけでなく、教師も支える役目を担っている。

＜成果・効果＞

- ・あいさつの声が全校的に、日常的に、自然にできるようになった
 - *地域から支援をいただいている感謝の心とおもてなしの心が出てきた
 - *地域の方からのお褒めの連絡が多くなった
- ・遅刻者・早退者・欠席者の激減、非行・不登校生徒数も激減した
 - *トイレ改修、朝読書、学びの共同体の授業の相乗効果で
- ・生徒指導情報の共有により、家庭教育支援にも発展した
- ・私立中学への進学も激減した（安心して通わせられる学校に）
- ・地域での生徒の愚行は、地域で指導後の報告としての連絡が多くなった



●環境支援 「学校はトイレから荒れ始める」、「生理的欲求が満たされず

して、学習（自己実現の欲求）は成り立たない＜マズローの5段階欲求説＞」、「環境は人をつくる」を生徒指導の基本に据え、豆ボラの最初の活動として、暗く汚く老朽化したトイレ掃除から始まった。生徒の中には、学校のトイレを使いたくないという理由で、早退する生徒が存在した。この活動により、行政による校内のトイレ改修工事につながり、ひいては市内全小中学校のトイレ改修工事に発展した。地域の力でトイレがきれいになったことで、生徒も清潔を保ち、地域への感謝の気持ちが育った。「地域が学校を変える」そのものの力を生徒も保護者も教員も実感した活動となり、豆ボラの存在の大きさが認識されることになった。平成23～25年度にかけ、荒んだ校内環境を少しでも潤いのある学校にと、これまでPTAで実施していた春秋の花植え作業を豆ボラも協働して活動を進める一方、全校生徒からの環境改善ニーズを集約し、校内の芝生化に取り組んだ。「愛知県森と緑づくり事業」に手を挙げ、ボランティアによる芝生の植栽活動を実施した。2日間で延べ500名以上の生徒・保護者・教職員・豆ボラ・地域による事業となった。23年度には地域の高齢夫妻から毎年100万円の寄付があり、中庭のレイアウト案を全校生徒から募集し、環境支援ボランティアである庭師の助言も取り入れて、生徒・教職員・PTA・豆ボラで改修に取り組んだ。芝生の維持管理も豆ボラで行っている。

＜成果・効果＞

- ・生徒のニーズが地域の力で現実の形に
 - *人・もの・金・情報が学校に投入
- ・生徒の心に潤いと、母校愛・地域愛につながった
 - *自分たちも参画し、自慢と誇りと校内美化意識が育った
- ・芝生化で憩いの場所に（お弁当や談笑の場に）
- ・芝生化が部活動の活動場所に
 - *上位大会の芝生コートの感触に備える（野球・サッカーテニス）
- ・あの時、芝生を植えた園児も、中学入学の期待に



●学校行事支援<キャリア教育>

平成25年度より毎年、大学生等ボランティアと生徒（2年生）のしゃべり場を実施している。高校進学を控え、受験や面接、高校・大学生活、アルバイト、就職など、多岐にわたる生徒の疑問に応え、少しでも将来への不安や悩みを解消し、目標に向かって頑張ってほしいという目的で実施している。多くの卒業生をはじめ、豆ボラを介して有給休暇をとつてまってくれるボランティアにとって、次の世代へのメッセージの場でもある。先輩の多くの失敗談を耳にしたり、年齢が近く話しやすいため、多くの生徒の進路目標への意欲化と学びの場となっている。まさしく生きる力を身に着けるアクティブ・ラーニングは、豆ボラ（地域学校協働本部）の存在があってこそ実現した取り組みである。

＜成果・効果＞

- ・生徒の事後感想から、受験の分からないことや不安が減った。
- ・先輩の生き方を学び、2年生から3年生に向けての学習に頑張ろうと思った。
- ・将来、就きたい職業についても助言を受け、これからすべきことがはつきりした、と前向きな感想が多かった。



●不登校支援く親の会 (Be~Heart) の開催

最重要教育課題である不登校対策として、元不登校だった中学生の母親が現不登校生徒の家族にピュアカウンセリングの手法でアドバイスするなど、同じ悩みをもつ保護者への支援を平成24年度から月1回、スクールカウンセラーも交えながら実施した。個人情報保護の観点から不登校支援ボランティアに誓約書を書いてもらい、安心して相談ができる体制を整えた。相談者は、様々な体験談から家族の支援の在り方を徐々に実践し、生徒の心の安定が図られるようになった。また、不登校体験から高校進学した卒業生が直接、現不登校生徒の家庭訪問をして、生徒の悩みや困り感に寄り添い、進学への後押しをするケースもみられた。参加者は、少しずつ元気を取り戻し、不登校に対する見方や考え方が改善されていく支援になった。本来、不登校がなく、このような支援の必要がないことが目的であり、1年半の活動後、現在は休止している。



<成果・効果>

- ・会を重ねるごとに、相談者の心の安定の変化が参加者にも分かり、支援の重要性を意識できた
- ・親の会の場面だけでなく、地域でも気にかけた相談者への支援の広がりがみられた
- ・不登校生徒に対して、同じ経験をした卒業生からの支援にも広がり、会の存在の大きさを実感した
- ・不登校の専門家であるスクールカウンセラーの指導助言は、会の運営に必要不可欠な存在だった

●地域学校協働本部の具体的な活動

- 1 学校教育課程内…学校長や教員の求めに応じた地域人材による支援活動（授業支援・学校行事支援）
- 2 学校教育課程外…地域人材による学校教育活動外の連携活動（土曜学習・放課後子ども教室・地域未来塾等）
- 3 学校教育活動外提案活動…地域性を生かした地域の企画による協働活動（まちづくり・地域活動等）

コーディネーターの心構え

- ・地域学校協働本部の目的と役目にブレがないように心がける
- ・学校のニーズや思いを、日常的に十分傾聴し、ズレのないボラ活動へ導く
- ・国・県レベルのボランティア養成講座や交流会を通じて、モチベーションアップと情報収集に努める
- ・各分野のボランティアが活動しやすいように、学校とボランティアのニーズを分かりやすく繋げる
- ・ボランティアの不安を払拭するおもてなしの心での対応に心がける（交流と情報交換の場）
- ・幅広い人脈の拡充とつながり力を常に意識する
- ・ボランティアは、学校（先生）が本当に感謝しているか、直ぐに分かるもの → 心からの感謝を
＊「ご苦労様です」ではなく「ありがとうございます」の言葉がけをボランティアに
- ・直ぐに子どもたちの変化は表れないが、地道に継続すると必ず表れる。
(創設から6年でようやく学校が変わり、先生方の反応も変わってきた)
- ・ボランティアを通じて、地域での出会い、様々な人との知り合いが増える
- ・生徒の笑顔や「あっ！おばさん！」と声をかけてもらえることがコーディネーターの喜び

ボランティアの便利道いは機関

●地域コーディネーターの機能（3つの機能と役割）

- 1 ネットワークづくり…地域資源の発掘と地域ネットワークの構築・維持
- 2 学校ニーズ支援…学校と地域の交流連携が推進されるような教育活動の企画や提案とその実施支援
- 3 プロジェクト推進…教育支援プロジェクトの運営管理・連絡・調整

●地域コーディネーターの役割（コーディネーションの概念図）<全国体験活動ボランティア活動総合推進センター コーディネーター 森本洋光氏>

